



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	英語動詞の「時制」の指導のための予備的考察
Author(s)	大竹, 政美
Citation	教授学の探究, 2, 7-23
Issue Date	1984-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/13515
Type	departmental bulletin paper
File Information	2_p7-23.pdf

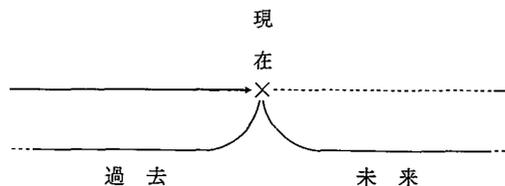


英語動詞の「時制」の指導のための予備的考察

大 竹 政 美
(北大教育学部大学院M. C. 1年)

0 時と時制・相

最初に、時 (time) と時制 (tense) とを、厳密に区別しておかなければならない。時は、言語からは独立しており、次のような図式¹⁾で表すことができる。



すなわち、時は、いわば、現在と呼ばれる点の絶えることのない流れであって、この広がりを持たない現在によって、過去・未来という無限の広がりを持つ2つの部分に分割される²⁾。したがって、過去・現在・未来が、常識的な意味で時間関係 (time relation) を示す3つの基本的な標識となっている。

これに対して、時制は、発話時 [= 話者が話している時] を基準にした過去 [= 発話時以前] ・現在 [= 発話時] ・未来 [= 発話時以後] という時間関係を、「動詞の形態によって示しうる限りにおいて、言語的に表現」³⁾する文法範疇のことである。したがって、時制の体系は、それぞれの言語によって異なっており、実際、ヨルバ語 (Yoruba) やイグボ語 (Igbo) のように、時制の標識 (tense markers) を持たない言語もある⁴⁾。

動詞の語形変化 (conjugation) という点だけから見れば、英語の時制には、現在時制 (present tense) と過去時制 (past tense) の2種類しかない⁵⁾。しかし、表す意味の上で、現在時制と過去時制とに対立するという消極的な理由で、迂言「時制」形式 (periphrastic tense-form) の1つである「助動詞 will/shall + 動詞の原形」を、未来時制 (future tense) と認める考え方もある⁶⁾。ところが、このような未来「時制」を認定することには、次のような問題がある⁷⁾。

(1) 未来「時制」は、独立した単語である助動詞 will, shall を用いており、形態論的には、現在時制・過去時制と同列に扱うことができない。

(2) 'will/shall + 動詞の原形' 以外にも、未来時を指示する形式はある。例えば、

‘be going to + 動詞の原形’: I'm going to ask you a question.

現在進行形: I'm flying to Paris tomorrow.

単純現在： Term starts on Monday.

‘be about to + 動詞の原形’: He's about to speak.

‘will/shall + 動詞の原形’を、意味上の理由で、未来時制形式と認めるならば、これらの形式もまた、未来時制形式としなければならないはずである。

(3) will, shall は、未来性 (futurity) 以外の意味を表すのにも用いられる。will は、例えば、

I'll come, if you ask me. (自発性)

She'll sit for hours. (習慣)

That'll be John. (蓋然性)

Oil will float on water. (一般的真理)

などの意味も持ち、shall は、例えば、

You shall have it tomorrow. (脅迫/約束)

などを表すのにも用いられる。したがって、未来性は、will, shall の持ついくつかの意味の1つに過ぎないのである。

要するに、will, shall は、may, can, must などと同様に、法助動詞 (modal) として扱うべきものなのである。例えば、

John will leave tomorrow.

は、

John $\left\{ \begin{array}{l} \text{may} \\ \text{can} \\ \text{must} \end{array} \right\}$ leave tomorrow.

などと、形態上、意味上の類似性を持っており、これら4つの文は、ともに、「ジョンが明日出発する」という未来の出来事に対する話者の現在の判断を表している⁸⁾。リーチ (1976) によれば、「われわれは過去や現在の出来事について持つと同じ確信を未来の出来事について持つことはできないのであり、この理由によってもっとも自信に満ちた予測でさえも話し手の態度をいくらかは示すに違いないし、また法性によって色付けされているに違いない。will と shall もその例外ではない。will と shall の未来的意味をもっともよく特徴付けることばは予測 (prediction) である——これは話し手の判断を含んでいるものである。したがって、will/shall 構文は『中立の』あるいは『無色の』未来にもっとも近いものを英語に与えてはいるけれども、これを過去時制および現在時制と同格の『未来時制』と記述してはならない。」⁹⁾

若林俊輔氏は、御自身が受けた「時制」の指導を回想して、次のように述べておられる。「事の発端は私が中学生であったころにさか上る。私は <will + 原形> は『未来形』と教わった。そこまではよくわかった。ところがやがて <would + 原形> が出てきた。先生は、『would は will の過去形である』とおっしゃる。ここで私は大混乱に陥ってしまった。『will が未来で would が will の過去形ならば、would は現在じゃないか』と思ったのである。will を『~であろう』とし、would を『~であったであろう』などと苦しまぎれに処理しようとしたが、そのうちに

<would have + 過去分詞> や <will have + 過去分詞> が登場し、これに仮定法がからんできたから、もう何が何やらわけがわからなくなったのである。……[will, would にかかわる] 混乱をかかえたまま運よく大学に入学。確か友人たちとゴチャゴチャ雑談をしていたとき will が『現在形』であることに突然気づいたのである。そしてそのとき、それ以前数年間にわたってかかえ込んでいた混乱が一瞬のうちに消滅してしまった。¹⁰「will は未来？ それならば shall はどうだというのか。これも未来か？ 高校のときにおぼえた文に

You shall die.

があるが、私は、これが未来とはどうしても納得できなかつた。仮にこの文を『殺してやる』とか『死んじまえ』とか訳すとして。言っている本人は『現在』言っているのであって、未来のことを言っているのではない。ずっとあとになって

Tomorrow is Sunday.

でも

Tomorrow will be Sunday.

でも、どちらでもいいけれど、Tomorrow is Sunday. で十分であるを知って、私の中では、will イコール『未来』という信仰は、完全に崩れ去ってしまったのである。¹¹

英語の時制として、他に、完了「時制」(perfect tense) [‘have + 過去分詞’ という形式をとる]、拡充「時制」(expanded tense) [‘be + 現在分詞’ という形式をとる；進行形(progressive form) と呼ばれているもの] を認める考え方もある。しかし、このような「時制」の認定には、次のような問題がある¹²。

- (1) これらの「時制」は、迂言「時制」形式をとり、形態論的には、現在時制・過去時制と同一に扱うことができない。
- (2) 現在時制・過去時制の表す意味が、発話時を基準にした時の区別であるのに対して、これらの「時制」の表す意味は、これらの「時制」がそれ自身では発話時とは関係づけることのできないある時点における、動作の完了・進行などの様相である。

したがって、これらの「時制」は、時制の範疇に属するものではなく、相 (aspect) [= 動詞の表す動作・状態が、どのような様態 (例. 完了/非完了, 進行/非進行) で経験されたり捉えられたりするか、ということを示す文法範疇]¹³ の下位範疇を成すもの、すなわち、完了相 (perfect aspect) ・進行相 (progressive aspect)¹⁴ と考えるのが妥当であろう。

時制と相は、下の表のように組み合わせることができる。なお、「非完了」「非進行」「普通の」という表現は、どちらかの相に関して無標の (unmarked) 形式であることを示すために用いられている。「単純」は、両方の相に関して無標の形式であることを示すために用いられている¹⁵。

	(非 進 行)	進 行 相
(非 完 了)	単純現在時制 <i>he sees</i>	(普通の) 現在進行時制 <i>he is seeing</i>
	単純過去時制 <i>he saw</i>	(普通の) 過去進行時制 <i>he was seeing</i>
完 了 相	(普通の) 現在完了時制 <i>he has seen</i>	現在完了進行時制 <i>he has been seeing</i>
	(普通の) 過去完了時制 <i>he had seen</i>	過去完了進行時制 <i>he had been seeing</i>

〈注〉

- 1) 大江 (1982 : 23).
- 2) イェスベルセン (1963 : 310).
- 3) *Ibid.* なお、彼自身は、現在時制と過去時制を固有の時制とし、完了「時制」を時制句 (tense-phrase) としている (*Ibid.*, pp 311, 318-319).
- 4) Comrie(1976 : 82). しかし、このことは、時を指示する言語形式をこれらの言語が持たない、ということの意味するものではない。時制の標識を持たないこれらの言語においては、非完結相(imperfective aspect)と現在時との間、および、完結相(perfective aspect)と過去時との間に、密接な関係があるのである。すなわち、時指示の文脈上の表示(例。時を表す副詞的語句)が無い場合には、非完結形(imperfective forms) [=状態動詞の単純形, または非状態動詞の *n̄/nā* 形]は、現在を指示していると解釈され、完結形(perfective forms) [=非状態動詞の単純形] は、過去を指示していると解釈される。非完結形は、時の明示的な(overt) 表示がなされている場合にのみ、過去を指示していると解釈されるであろう。(*Ibid.*, pp 82-83)
- 5) クワーク&グリーンバウム (1977 : 57-58, 67).
- 6) 福村 (1954 : 1-2).
- 7) Palmer (1971 : 193-194).
- 8) 荒木・小野・中野 (1977 : 33).
- 9) リーチ (1976 : 85).
- 10) 若林 (1983 : 112).
- 11) *Ibid.*, p. 114.
- 12) 太田 (1954 : 1).
- 13) クワーク&グリーンバウム (1977 : 57).
- 14) *Ibid.*, pp. 57-58. ただし、彼らは、'have + 過去分詞' という形式をとるものを "perfective aspect" と呼んでいる。
- 15) リーチ (1976 : 4-5).

1 時制・相の導出

Chomsky (1965), およびそれに準拠した標準理論 (standard theory) 派の変形文法書においては, 時制・相を, 下の(1)と(3), または(2)と(3)の句構造規則 (phrase structure rule) によって導出する。ただし, Aux は助動詞, Tense は時制辞, M は法助動詞を指す。

- (1) a. $S \rightarrow NP \text{ Predicate-Phrase}$
 b. $\text{Predicate-Phrase} \rightarrow \text{Aux VP (Place) (Time)}$
 (2) $S \rightarrow NP \text{ Aux VP}$
 (3) $\text{Aux} \rightarrow \text{Tense (M) (have-en) (be-ing)}$

Aux 導出のために, (1)と(2)のどちらの規則を採用するかは, 文法書によって異なるが, (3)の句構造規則は, 標準理論派の文法書では一様に採用されている¹⁾。なぜ, このような順序の記号列が得られるのだろうか。これには2つの根拠, すなわち,

- (1) 英語の表層形式の配列順序
 (2) 変形操作上の単純化
 が考えられる²⁾。

N. B. 英語では, 動詞が be 動詞の場合と, 主語が3人称単数で時制が現在時制の場合に, 動詞が, 主語の人称 (person)・数 (number) に基づいた語形変化を受ける。したがって, 英語には, 主語の名詞句の人称と数に関する素性 (feature) を時制辞 [=現在辞 (Pres) と過去辞 (Past) のどちらかに書き換えられる統語範疇] のところに転写する変形規則 (transformational rule) である, 数の一致規則 (number agreement) があるものと考えられる。他の場合にも, この規則の適用を受けているのであるが, 動詞は, 表面的には, 数・人称に基づいて語形が変化することはない。

数の一致規則

$$\begin{array}{ccccccc}
 \text{SD: } X & \text{NP} & \left\{ \begin{array}{l} \text{Pres} \\ \text{Past} \end{array} \right\} & X & & & \\
 & & \left[\begin{array}{l} \alpha \text{ person} \\ \beta \text{ plural} \end{array} \right] & & & & \\
 & 1 & 2 & 3 & 4 & \Rightarrow & \\
 \text{SC: } 1 & 2 & 3 & 4 & & & \\
 & & & & \left[\begin{array}{l} \alpha \text{ person} \\ \beta \text{ plural} \end{array} \right] & &
 \end{array}$$

第2項の下に記された person は主語の人称を表し, α の値は1 (1人称), 2 (2人称), 3 (3人称) のいずれかである。plural は主語の数を表し, β の値は- (単数) と+ (複数) のいずれかである。この変形規則によって, 例えば, 3人称であることを表す素性 [3 person] と, 単数であることを表す素性 [- plural] が Pres に転写された場合には, 適当な音形規則 (phonological rule) が適用されて, その Pres が -s [=3人称単数現在時制を表す形態素 (morpheme)] に変わり, その他の人称・数の場合には ϕ [=ゼロ] に変わるようにする³⁾。

1. 1 英語の表層形式の配列順序⁴⁾

ここで、英語の動詞列 (verbal sequence) を考察してみよう。動詞列というのは、下に例示されているように、1つの [単] 文における動詞のみ、または助動詞を伴った動詞から成る列、すなわち、「(助動詞+) 動詞」のことである。これには、助動詞が2個以上連続する場合も含まれる。

- a. John *writes*.
- b. John *wrote*.
- c. John *has written*.
- d. John *had written*.
- e. John *is writing*.
- f. John *was writing*.
- g. John *has been writing*.
- h. John *had been writing*.
- i. John *will write*.
- j. John *would write*.
- k. John *will have written*.
- l. John *would have written*.
- m. John *will be writing*.
- n. John *would be writing*.
- o. John *will have been writing*.
- p. John *would have been writing*.

上に見られるように、動詞 *write* の変化形は、*writes*, *wrote*, *written*, *writing* と多様である。これらの変化形間の違いは、それぞれの変化形に、それぞれ異なった接辞 (affix) を関連づけることによって表示される。すなわち、現在形の接辞を Pres, 過去形の接辞を Past, 過去分詞の接辞を en, 現在分詞の接辞を ing とすると、これらの形式が同一の動詞の変化形であるという事実を、次のように明示的に表示することができる。

writes : write + Pres
wrote : write + Past
written : write + en
writing : write + ing

さらに、上に示した動詞列の内部構造を図式的に表示すると、次の表のようになる。

動 詞 列	例
{ V+Pres	John <i>writes.</i>
{ V+Past	John <i>wrote.</i>
{ have+Pres V+en	John <i>has written.</i>
{ have+Past V+en	John <i>had written.</i>
{ be+Pres V+ing	John <i>is writing.</i>
{ be+Past V+ing	John <i>was writing.</i>
{ have+Pres be+en V+ing	John <i>has been writing.</i>
{ have+Past be+en V+ing	John <i>had been writing.</i>
{ M+Pres V	John <i>will write.</i>
{ M+Past V	John <i>would write.</i>
{ M+Pres have V+en	John <i>will have written.</i>
{ M+Past have V+en	John <i>would have written.</i>
{ M+Pres be V+ing	John <i>will be writing.</i>
{ M+Past be V+ing	John <i>would be writing.</i>
{ M+Pres have be+en V+ing	John <i>will have been writing.</i>
{ M+Past have be+en V+ing	John <i>would have been writing.</i>

この図式化によって可能となる一般化は、すべての動詞列において、Tenseの区別 [=Pres/Past] が、その動詞列の最初の要素の後に表示されている、ということである。

さしあたり、Tense, en, ingの存在を無視すると、英語の動詞列の表層形式は、次のようにまとめることができる。

a.			V
b.	have		V
c.		be	V
d.	have	be	V
e.	M		V
f.	M	have	V
g.	M		be V
h.	M	have	be V

ここで注目すべき規則性は、すべての動詞列が1つのVを含み、常にそのVは動詞列の最後の要素である、ということである。このことは、動詞列の他の要素が、Aux と呼ばれる単一の節点 (node) を成す構成素 (constituents) である、と仮定することによって捉えることができる。したがって、英語の文に現れ得るすべての動詞列のみを導出する規則を指定するという問題は、節点 Aux を展開する規則を設定するという問題に還元されることになる。

さらに、上の表に見られる動詞列の要素の分布 (distribution) には、顕著な規則性がある。すなわち、M, have, be は、随意的 (optional) 要素であるが、現れる場合には、V の前にそれぞれこの順序で現れる。したがって、動詞列の内部構造は、次のように表記される。

(M) (have) (be) V

V 以外の要素は Aux の構成素である、と仮定することができるから、Aux を展開する句構造規則は、

Aux → (M) (have) (be)

次に、接辞 Tense, en, ing を考慮に入れば、動詞列の表層形式は、次のようにまとめることができる。

			V + Tense
	have + Tense		V + en
		be + Tense	V + ing
	have + Tense	be + en	V + ing
M + Tense			V
M + Tense	have		V + en
M + Tense		be	V + ing
M + Tense	have	be + en	V + ing

この表には、いくつかの重要な規則性が見出される。第1に、Tense は、すべての動詞列に現れ、しかも、動詞列で最初に現れた要素の後に付く。さしあたり、Tense は、節点 Aux の義務的 (obligatory) 構成素であって、Aux の先頭に現れる、と仮定すると、

Aux → Tense (M) (have) (be)

さらに、Tense が動詞列の最初の要素の後に付く、という一般化を捉えるために、次の変形規則を設定することにする。

Tense 移動変形 (Tense hopping) : Tense を、その直後に現れる要素の後に付けよ。

第2の規則性は、接辞 en, ing は、それぞれ have, be が現れる場合にのみ随伴して現れる、ということである。したがって、Aux を展開する句構造規則は、次のように修正される。

Aux → Tense (M) (have-en) (be-ing)

しかし、この一般化を、このように句構造規則の形で捉えると、別の一般化、すなわち、en、ing が現れる場合には、en は have の直後に現れる要素 [=be または V] の後に付き、ing は be の直後に現れる要素 [=V] の後に付く、ということが捉えられなくなるように見える。

1.2 変形操作上の単純化⁵⁾

上で述べたいくつかの一般化を句構造規則のみで捉えることは不可能であるが、次のような変形規則を設定すれば、解決が可能である。

en/ing 移動変形 (en/ing hopping) : en/ing を、その直後に現れる要素の後に付けよ。

この変形規則によって、助動詞と接辞の共起(co-occurrence)特性、および、表層構造(surface structure)における接辞の分布に関する一般化を捉えることが可能になる。ここで重要なのは、en/ing 移動変形は、Tense 移動変形と全く同一の操作を実行していることである。そこで、変形規則をさらに一般化すると、

Tense/en/ing 移動変形(Tense/en/ing hopping) : Tense/en/ing を、その直後に現れる要素の後に付けよ。

もし Tense が、上述のように、Aux の先頭に現れると仮定しないと、3つの接辞の移動を、このような単一の変形規則で処理することができず、変形操作が単純化されない⁶⁾。

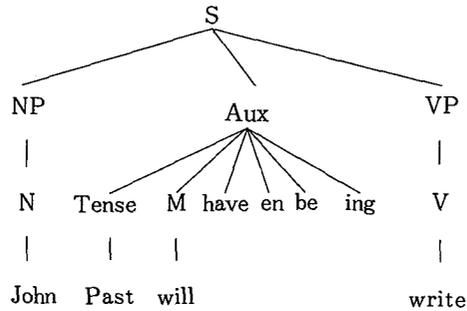
次に、この非形式的な (informal) 変形規則を、精密かつ形式的 (formal) なものに再定式化する必要がある。Tense/en/ing 移動変形が果たすべき機能の例証として、最も複雑な例

John would have been writing.

を考察してみよう。ここでは、Aux が S の直接構成素(immediate constituent)である、すなわち、

$S \rightarrow NP \text{ Aux VP}$

という句構造規則によって Aux を導出する、と仮定すると、上の文の深層構造 (deep structure) は、



説明の便宜上、終端記号列 (terminal string) のみを扱うことにする。

John Past will have-en be-ing write

他方、表層構造は、

John will+Past have be+en write+ing

従って、求める変形規則は、接辞が要素の前にある深層構造を、接辞が要素の後にある表層構造に、形式の上で関連づけるように設定しなければならない。

Tense, en, ing を表す共通の術語は接辞 (affix) であるから、これらを、Affix という統語範疇に属するものとして扱う。また、動詞列の要素の集合は、動詞のすべて、助動詞 have・be、法助動詞のすべてから成る集合であるが、これら3つの範疇は、名詞 (N) のような名詞的な (nominal) 範疇に対するものとしての動詞的な (verbal) 範疇であるという、共通の特性を持っている。この統語素性を [+V] と表示することにする。定式化すべき変形規則の機能は、接辞を、その直後にある動詞的 [= [+V] という素性を持った] 要素の後に付けることであるから、この変形規則は、接辞移動変形 (affix hopping) と呼ばれ、次のようなものとして設定される。

SD:	X	Affix	[+V]	Y	
	1	2	3	4	⇒
SC:	1	φ	3+2	4	

[+V] という項は、素性 [+V] を持った構成素を指している。

〈注〉

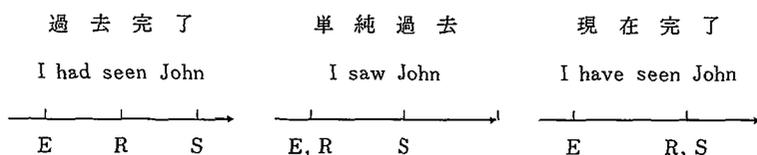
- 1) 荒木・小野・中野 (1977: 27, 202).
- 2) *Ibid.*, pp. 13-16.
- 3) 松浪・池上・今井 (編) (1983: 579), 荒木・小野・中野 (1977: 13-14).
- 4) *Culicover* (1976: 38-50).
- 5) *Ibid.*, pp. 50-52, 57-58.
- 6) 荒木・小野・中野 (1977: 15-16, 23-24).

2 時の意味解釈

ライヘンバッハ (1982) によれば、「異^(マ)った時制の意味を説明する際、文法の教科書が出会う困難は、時制によって与えられる時間の決定が、三つの要素 [= 発話時 (point of speech, S), 基準時 (point of reference, R), 事件時 (point of event, E) という 3 つの時点] から成る構造であるということがわかっていないということに起因するのである。」¹⁾「若干の時制においては、三つの時点のうち二つは同時である。たとえば、単純過去では事象の起こった時点 [= E] と言及の時点 [= R] は同時である。そして、いずれも発話の時点 [= S] より前にある。……これによって単純過去が現在完了から区別される。‘私はチャールズに会った’ (I have seen Charles) という言明においては、問題の事象 [= E] は発話の時点 [= S] より前のことである。しかし、……発話の時点 [= S] と言及されている時点 [= R] が一致するのである。現在完了の意味はキーツ [= John Keats, “On First Looking into Chapman’s Homer” (1816)] からとった次の節 [= ll. 1-4] によって例示することができる。

Much have I travelled in the realms of gold,
And many goodly states and kingdoms seen;
Round many western islands have I seen
Which bards in fealty to Apollo hold.

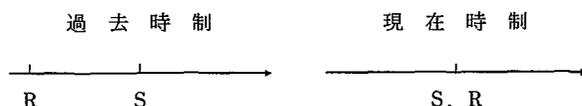
……この場合には過去の事象が、同じく過去に含まれる時点からではなく発話の時点と一致する立場から眺められているということがわかる。これは、キーツのことばが叙述の形ではなく、生々しい直接の報告によって読者を感動させる理由である。すなわち、表面的な考察では、二つの時点に関係しているように見える時制の区別に対してさえ、三つの時点が必要であることがわかる。²⁾ 実際、過去完了・単純過去・現在完了の表す意味が区別されるのは、発話時 S に対する事件時 E の相対的時間関係の違いによってではなく(どの場合でも E は過去時に属する)、基準時 R がどこに置かれているかによってである。



基準時 R の存在に関わって、ある中学校の英語教師は、現在完了の指導の難しさを次のように語っている。「たとえば“*He has become a good student.*”を『よい生徒になりました』と訳す。こんどそれを英語に訳させると“*He became a good student.*”が出てくる。そしてこの文からは、“*He was a good student.*”という認識しか出てこない。たしか出発は“*He wasn't a good student.*”だったはずですが。だんだんとズレていって最後に脱線する。競合脱線ということですね。これが多い。一方、“*He has become a good student.*”は、“*He is a good student now.*”ということだと言うと、『そんならなんで最初からそう言えへんねん』と思うらしい。用法の分類に汲々としていて、現在完了の本質という視点からの指導がどうしても抜けてしまう。」⁴⁾

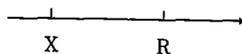
2. 1 時制の意味表示

時制は、発話時 S に対する基準時 R の相対的時間関係を示すものであるから、英語の時制の基本的意味は、



のように表示することができる。

上述のように、will/shall は、未来時制の標識と認めることはできないが、意味の上で未来時を指示する未来表現の一つであること確かである。では、この未来表現の意味は、どのように表示すべきなのであろうか。ライヘンバッハ(1982)は、単純未来には2通りの意味解釈が可能であることを指摘している。すなわち、単純未来は、‘*Now I shall go*’のような文においては、“S, R-E”という意味で表すが、‘*I shall go tomorrow*’のような文においては、“S-R, E”という意味を表す、とされる⁵⁾。そもそも未来表現というものは、ある時点 X において、出来事(または状態)が [X から見た] 未来のある時点 R において生じることが、予測されていることを表すものである⁶⁾。したがって、いわゆる単純未来(simple future)の will/shall が表す意味は、



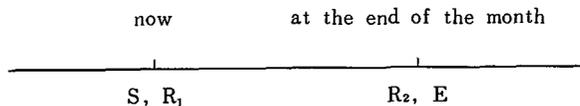
のように表示することができる。この意味表示は、ライヘンバッハ(1982)が指摘した、単純未来が2つの相異なる意味を持つ事実を統一的に説明することができる。別な言い方をすれば、

単純未来の will/shall を含む文において、現在時と未来時という異なった時を表す2つの時の副詞（句）が共起し得ることを説明できる。例えば、

Now we will have no money at the end of the month.— Huddleston, 1969

（いまや今月末にはわれわれは文なしになりそうだ）

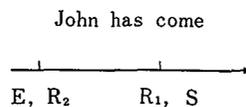
という文の時の意味表示を



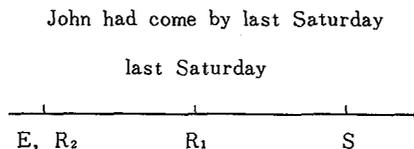
とすると、now は R₁ [=S] を規定し、at the end of the month は R₂ [=E] を規定することになり、意味上の矛盾を生じさせないで済む⁷⁾。

2.2 相の意味表示

完了相を含む文は、上述の will を含む文の場合と同様、意味上2つの時点を含む。例えば、



のような現在完了の文では、「ジョンが来た」、現在時 [=基準時 R₁=発話時 S] 以前のある時点 [=基準時 R₂] と、その事がある意味を持つ時点 [=基準時 R₁]（すなわち現在時）、という2つの時点が意味されている。また、



のような過去完了の文は、「ジョンが来た」、過去の特定の時点（この場合、この前の土曜日） [=基準時 R₁<発話時 S] 以前のある時点 [=基準時 R₂] と、その事がある意味を持つ時点 [=基準時 R₁]（すなわち、この前の土曜日）、という2つの時点を含む。完了相の文が表すこれら2つの時点のうち、文が表す事態が発生した時点（副時点） [=基準時 R₂]、その事態がある意味を持つ時点（主時点） [=基準時 R₁] と呼ぶことにする。例えば、上の現在完了の文の深

層構造は、

John Pres have-en come

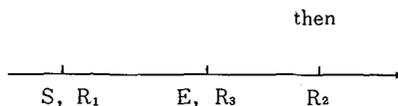
と分析されるので、主時点 [=基準時 R_1] は時制が表し、副時点 [=基準時 R_2] は完了相が表すものと考えることができる。また、完了相を含む文においては、時制が表す時点 [=基準時 R_1] は、完了相が表す時点 [=基準時 R_2] の軸 (axis) [=相対的時間関係を示す場合の基準となる時点; X で表す] となる、ともいうことができる。なお、上の過去完了の文のように、具体的な過去時を表す時の副詞句を含む文では、完了相が表す副時点 [=基準時 R_2] の軸 [=X] となる主時点 [=基準時 R_1] は、時制というよりも時の副詞句が表すことになる。上で、完了相は、副時点で発生した事態が主時点で「ある意味」を持つことを表すと述べたが、完了相を含む文は、主時点 [=基準時 R_1] と関連 (relevance) のあるものとして捉えられた副時点 [=基準時 R_2] において発生した事態 (あるいは、主時点まで続く時間幅の中で継続的ないしは反復的に存在した事態) を、話者が主時点 [=基準時 R_1] において、既成事実 (accomplished fact) として捉えていることを表すのである。例えば、John has come という文の話者は、現在時 [=基準時 R_1 = 発話時 S] と関連のあるものとして捉えた副時点 [=基準時 R_2] に発生した「ジョンが来た」という事態が、現在時 [=主時点] には既成事実となっていることを述べているのである。そこで、完了相の基本的意味を次のように表示することにする⁸⁾。



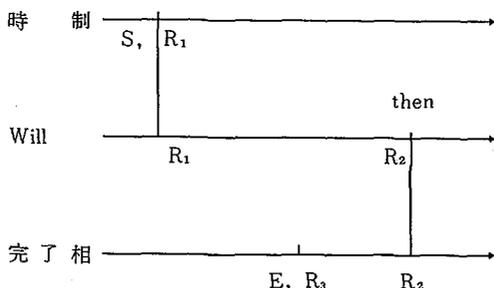
「未来」完了の文、例えば、

John will have finished it by then.

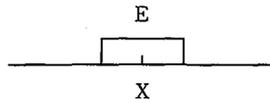
の時の意味表示は、次のようになる。



このような「未来」完了の文の時の意味解釈においては、時制が表す時点 will の軸に、will が表す時点完了相の軸に、指定しなければならない⁹⁾。すなわち、

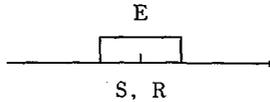


進行相の基本的意味は、次のように表示される。



例えば,

John is running. (<John Pres be-ing run)



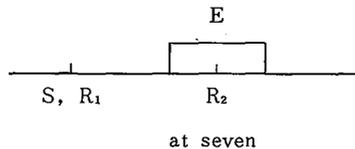
という文においては、進行相は、John-run という命題が表す John の動作が、現在時制が示す時点 [=基準時 R=発話時 S] において、進行中であることを示す¹⁰⁾。

さらに、次のような「未来」進行形、完了進行形の場合を考えてみよう。

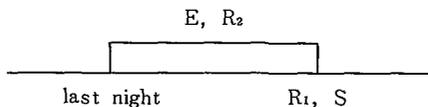
He will be eating his supper at seven.

It has been raining since last night.

上の「未来」進行形の文の場合には、「彼が夕食を食べる」という動作が進行中であるのは、will が表す未来の時点であって、時制が表す時点 [=基準時 R=発話時 S] ではない。すなわち、進行相の軸は will が提供する。したがって、この文の時の意味表示は、次のようになる。



完了進行形の文の場合も考えてみよう。この文は、it-be-raining という状態が、過去の特定の時点（この場合、昨夜）から現在時まで継続していることを表している。ここでは、完了相が表す時 [=基準時 R₂] が、進行相の表す状態の継続期間 [last night ≤ R₂ ≤ R₁] を表し、前者は、後者の一種の軸を成している。したがって、この文の時の意味表示は、次のようになる¹¹⁾。



2.3 要 約

以上に観察してきたことをまとめると、次のようになる。いま A, B 2つの時の要素に関して、

Aの表す時点がBの表す時点の軸を成す場合に、AがBを「支配する」と言うことにするならば、時制(Tense), will, 完了相(Perf), 進行相(Prog)という4つの時の要素の支配関係は、次のように表すことができる。

Tense (will (Perf (Prog)))

《注》() 外の要素が () 内の要素を支配することを表す。

Tense以外の要素は随意的に現れるので、例えば、will, Perfを欠く文においては、TenseがProgを直接支配する、すなわち、Tenseの表す時点がProgの軸を成す。単文(または単一節)中にあるのは、上に示した支配関係に従って、それぞれの時の要素の意味表示に含まれる軸変項Xに、それより上位の時の要素が表す時点を、その値として代入しなければならない¹²⁾。

〈注〉

- 1) ライヘンバッハ (1982: 301).
- 2) *Ibid.*
- 3) *Ibid.*, p. 302.
- 4) 五島・織田 (1977: 89).
- 5) ライヘンバッハ (1982: 308).
- 6) 荒木・小野・中野 (1977: 162-163).
- 7) *Ibid.*, pp. 163-165.
- 8) *Ibid.*, pp. 168-170.
- 9) *Ibid.*, pp. 173-174.
- 10) *Ibid.*, pp. 174-175.
- 11) *Ibid.*, pp. 175-176.
- 12) *Ibid.*, pp. 176-177.

参 考 文 献

- 荒木一雄・小野経男・中野弘三 1977. 『助動詞』現代の英文法 第9巻 研究社出版。
Chomsky, Noam. 1965. *Aspects of the Theory of Syntax*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
Comrie, Bernard. 1976. *Aspect*. Cambridge: Cambridge University Press.
Culicover, Peter W. 1976. *Syntax*. New York: Academic Press.
福村虎治郎 1954. 『時制と態』英文法シリーズ 第11巻. 研究社出版。
五島忠久・織田 稔 1977. 『英語科教育 基礎と臨床』研究社出版。
イエスベルセン, O. 1963. 『英文法エッセンシャルズ』, 中島文雄訳, 千城。
リーチ, G. N. 1976. 『意味と英語動詞』, 國廣哲彌訳, 大修館書店。
松浪 有・池上嘉彦・今井邦彦(編) 1983. 『大修館英語学事典』大修館書店。

- 大江三郎 1982. 『動詞(I)』講座・学校英文法の基礎 第四巻. 研究社出版.
太田 朗 1954. 『完了形・進行形』英文法シリーズ 第12巻. 研究社出版.
Palmer, Frank. 1971. *Grammar*. Harmondsworth: Penguin Books.
ライヘンバッハ, H. 1982. 『記号論理学の原理』, 石本新訳, 大修館書店.
若林俊輔 1983. 『これからの英語教師』 大修館書店.